



ハート王国①

スーのどんぐり



にし はる

ハート王国の王さまは、こころがホカホカ、あたたかい王さまです。

王国のなかで、こまった人がいれば、いつもたすけてくれるし、おたんじょう日の人があれば、いつもおいわいしてくれます。

このあいだも、こんなことがありました。

ハート王国の森にすんでいるリスのスーが、こまったかおをしてあるいていました。

けらいをつれて、おさんぽをしていた王さまは、そんなスーを見つけて言いました。

「おや、スー、そんなこまったかおをして、どうしたんじゃ。」

スーは、王さまに気づいて、あわてておじぎをして言いました。

「あ、王さま、こんにちは！じつは、きょうは、ともだちのシンのおたんじょう日なんですが、ぼく、なにもプレゼントできるものがないんです。」

「おお、そうか。シンというのは、南の畑にすんでいる、はたらきもののわかものじゃな。」

「はい、そうです。」

「スー、プレゼントというのは、ごうかなものじゃなくても、まごころがこもってあればいいんじゃないよ。」

「まごころ…。じゃあ、ぼくのたいせつにしている、どんぐりのぼうしでもいいんでしょうか。」

そう言って、スーは、ポケットからたくさんのどんぐりのぼうしをとりだしました。

「もちろんじゃ。そうじゃ、わしもシンにプレゼントをしたいから、このどんぐりのぼうしをつかって…。」

王さまはそう言って、キラキラ光るきれいなひもを、けらいにじゅんぴさせました。そして、

どんぐりのぼうしをそのひもでつなぎあわせて、すてきなかざりをつくりました。

スーはとてもよろこびました。

「これなら、シンのむぎわらぼうしにつける、かざりになりそうです！」

そして、さっそく、スーと王さまは、シンのところへプレゼントをとどけに行きました。

シンは、畑をたがやしていましたが、王さまがきたのを見て、あわててむぎわらぼうしをとって、あいさつしました。

「王さま、こんにちは！」

「やあ、シン、きょうもがんばっておるのう。ところで、今日はたんじょう日だそうじゃな。」

王さまはそう言って、スーのせなかをおしました。スーは言いました。

「シン、おたんじょう日、おめでとう！これは、王さまとぼくで作った、プレゼントだよ！」

シンは、スーがさしだした、どんぐりのぼうしのかざりをうけとって、言いました。

「わあ！なんてすてきなかざりだろう！ぼく、とってもうれしいよ。むぎわらぼうしにつけておくのにピッタリだ。王さま、スー、ほんとうにありがとうございます。」

王さまとスーは、かおを見あわせて、ニッコリしました。

そんなハート王国の、ある秋の日のことです。

今日は、王さまのおたんじょう日。

王国のみんなは、大すきな王さまをおいわいしようと、いろんなプレゼントをじゅんびして、おしろへ向かいました。キンピカのふくや、ピカピカのほうせき、がいこくのめずらしいじゅうたんなど、みんな、王さまにふさわしいりっぱなプレゼントです。

リスのスーも、大すきな王さまになにかプレゼントをしたいとかがえましたが、王さまにプ

レゼントできるようなものは何もありません。

スーはなやみました。そして、おもいだしました。「プレゼントというのは、まごころがこもってあればいいんじゃないよ。」という王さまのことばを。

スーは、みんなのような、ごうかなものはないけれど、いちばんだいじなものを王さまにプレゼントしようときめました。そして、冬のためにたくわえてきたどんぐりを、ひとつのこらず、ピカピカにみがいて、ふくろに入れて、おしろへ向かいました。

おしろには、すでに、たくさんの人たちがならんでいました。その中に、スーもおそろおそろならんでみると、となりの人が言いました。

「ぼくは、金のおさらをもってきたんだ。きみは何をもってきたんだい。そのふくろに、ほうせきでも入っているのかい？」

スーは、少しはずかしくなったので、小さな声で、

「どんぐりだよ。」

と言いました。

すると、それを聞いたまわりの人たちは、大わらい。

「王さまに、どんぐりをさしあげるなんて、聞いたことがない！あっはっは！」

スーのかおは、まっかになりました。

でも、スーは、どうしても王さまのおたんじょう日のおいおいをしたかったので、がまんして、じゅんばんをまちました。

しばらくして、スーが王さまの前へ行くじゅんばんになりました。

「王さま、おたんじょう日、おめでとうございます。」

と言って、スーは、どんぐりをぜんぶつめこんだふくろを、ドキドキしながら王さまにさしあげました。

「やあ、スー。どうもありがとう。」

と、王さまは言って、そのふくろから、どんぐりをひとつとりだしました。そして、言いました。

「スー！こんなすてきなどんぐり、どこでみつけたのかね？それに、こんなにたくさん。これは、スーの、冬のあいだのだいじな食べ物なのではないかね？」

スーは、王さまがよろこんでくださったので、ホッとして言いました。

「はい、王さま。ぼくは、王さまがだいすきなので、ぜんぶもらってください！」

王さまは、言いました。

「そうかね…。スー、どうもありがとう。」

そうじゃ、これは、くびかざりにして、いつもくびにかざっておくことにしよう。」

これには、けらいたちも、まわりの人たちも、びっくりしてしまいました。

スーは、王さまがよろこんでくださったことが、うれしくてうれしくて、ピョンピョンとびはねながら、森へかえっていきました。

やがて冬になりました。

ある日、王さまは、ダイヤ王国へ行くことになりました。

王さまは、かんむりをかぶり、つえをもち、それから、おたんじょう日にみんながくれた、キンピカのふくや、ピカピカのほうせきなどもみにつけて、りっぱなかつこうになりました。

そして、スーがくれたどんぐりのくびかざりも、くびにかけました。

それを見て、けらいのひとりが言いました。

「王さま、りっぱなかつこうをなさっているのに、そのどんぐりのくびかざりは、にあいせん。きょうは、はずしていったほうがよいのではないのでしょうか。」

すると、王さまは

「これは、ただのどんぐりではないのじゃよ。スーのまごころがっぱいつまった、すばらしいどんぐりなのじゃ。」

そう言って、どんぐりのくびかざりをつけたまま、ダイヤ王国へ向かいました。

ダイヤ王国への道のとちゅうには、きけんなばしょがありました。「さんぞく」というわるい人たちがいて、道をとおる人から、いろいろなものをうばうのです。

さんぞくたちは、

「きょうは、ハート王国のぎょうれつがとおるぞ。王を人じちにして、ハート王国からカネをたくさんいただく。ひひひ！」

と、たくらんでいました。

そうとも知らず、そのきけんな道を、ハート王国のぎょうれつがとおりにかかりました。

するとたちまち、かくれていたたくさんのさんぞくたちが、ワアーッ！とでてきて、王さまをさがしはじめました。

「いちばんりっぱなかつこうをしているやつが王だ。さがせ！さがせ！」

ボスのよびかけに、さんぞくたちは、ちまなこになって、王さまをさがしました。

けらいたちが、王さまをまもろうと、ひっしにたたかいましたが、とうとう、さんぞくたちは

、いちばんりっぱなかつこうをしている王さまのところにやってきてしまいました。

「さんぞくたちよ、こんなわることをしてはいかん。」

王さまは言いました。すると、さんぞくのボスが、ちかづいてきました。

「きさまが王だな。…ん？」

ボスは、王さまのくびにかけてある、どんぐりのくびかざりを見つけて言いました。

「やけにピカピカしたくびかざりだとおもったが、ただのどんぐりじゃないか。こんな、どんぐりなんかのくびかざりをしているやつが、王のはずがない。さてはきさま、にせものだな。ほんものの王はどこだ！」

「わしがほんものじゃ。」

「うそを言うな！くそー、きょうは、にせもののぎょうれつだったんだな。だまされた。しかたない、でなおしだ。みんな、行くぞ！」

ボスが大きなこえでそう言うと、さんぞくたちは、たちまちいなくなってしまったのです。

王さまも、けらいたちも、手を取りあって、ぶじをよろこびました。

そうして、ぶじにダイヤ王国にたどりついた王さまは、ダイヤ王国の王さまにそのことをはなしました。

すると、ダイヤ王国の王さまは、どんぐりのくびかざりを見て、言いました。

「おお、これはすばらしい！ダイヤ王国にもこうきゅうなどんぐりがありますが、これほどきれいなどんぐりは見たことがありません！」

ハート王国の王さまは言いました。

「これは、リスのスーが、わしのたんじょう日にくれたものなのです。わしをおもうスーのまごころが、わしをまもり、国をすくってくれたのじゃとおもいます。」

そのころ、スーは、家の中で冬をすごしていました。冬のためにたくわえてあったどんぐりは、王さまにぜんぶさしあげたので、食べるものは何もありません。

とてもおなかがすいていましたが、あまみずをのみながら、うえをしのいでいました。

そんなある日、

トントントン

と、スーの家のドアをたたくおとがしました。スーは、おなかがすいてうごけませんでしたが、やっとのことで、ドアをあけました。

すると、そこに、王さまが立っているではありませんか。

「王さま...、こんにちは...！すみません、冬なので、なにもありませんが、どうぞ、おあがりください。」

そんなスーを見て、王さまは言いました。

「おお、スー、こんなにやせてしまって。」

そして、王さまは、ダイヤ王国へ行くみちのとちゅうでおきたことを、スーに話してきかせました。

「スー、ほんとうに、ありがとう。おまえのまごころにすくわれたのじゃよ。それで、きょうは、おれいにきたんじゃよ。」

そう言って、王さまはけらいにめいれいしました。

「さあ、はやくもってまいれ。」

すると、どうでしょう。けらいたちがつぎからつぎに、ホカホカのりょうりをはこんでくるで

はありませんか。ドングリのシチュー、どんぐりのパイ、どんぐりのソテー、などなど！スーの
だいすきなものばかりです。

王さまは言いました。

「これは、ダイヤ王国の、こうきゅうどんぐりのりょうりじゃよ。さあ、えんりょなくたべな
さい。」

スーは、あまりのことにびっくりしましたが、とてもおなかがすいていたので、えんりょなく
、もりもりとたべました。

そんなスーを、王さまとけらいたちは、ニコニコと見ていました。

どれも、ほっぺたがおちそうなほど、おいしいりょうりばかりでした。

スーはおなかがいっぱいになって、言いました。

「王さま、本当にありがとうございます。ぼく、おなかいっぱいになりました。」

「スー、こちらこそ、どうもありがとう。よろこんでくれて、よかった、よかった。」

そして王さまは、さらに、馬車いっぱいのかうきゅうどんぐりをおいて、おしろへかえって
きました。

スーは、おなかもこころもホカホカの冬をすごすことができ、王さまがさらに大すきになっ
たのでした。